

八潮の地形

八潮市は、関東平野のほぼ中央に広がる中川低地上に位置します。海拔1～4mの低い土地で、東を中川、西を綾瀬川、南を圀川や大場川と大部分が河川に囲まれています。河川沿いには土砂が堆積して微高地となった自然堤防が、その後ろには粒子の細かい泥が堆積する後背湿地が形成されています。中川沿いの自然堤防は流路に沿って連続的に発達していますが、綾瀬川沿いは丘状に点在し、また現在の河道から離れた地点にもみられます。「あやしの川」とも呼ばれる綾瀬川が、ひどく乱流していたことがわかります。

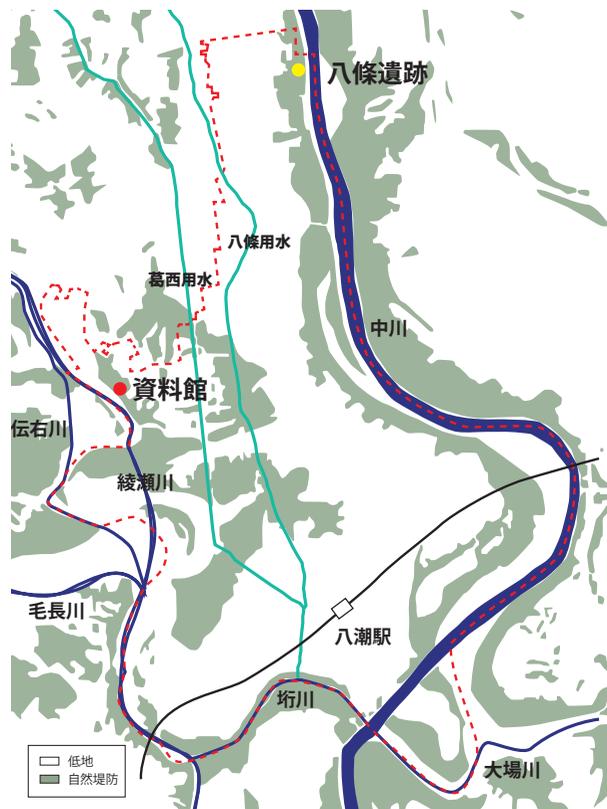
中川沿いの八條遺跡では、平安時代前期(9世紀後半ごろ)の住居跡が見つっています。現在、市域で見ついている一番古い集落です。地名「八條」は、当時この周辺の湿地に条里水田が広がっていたことに由来すると考えられています。人々は古くから自然堤防上に住み、後背湿地を開墾して生活してきました。



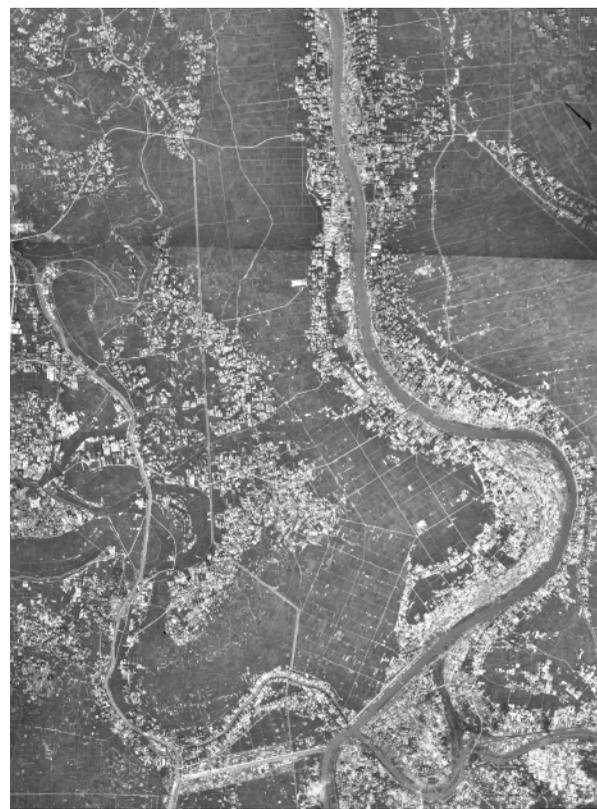
八條遺跡（上空から）



八條遺跡住居跡



八潮市周辺の河川と自然堤防



昭和22年(1947)撮影 航空写真

この写真は昭和22年に八潮市域の上空から撮影されたもので、白く見えるのは主に住宅です。

左図の自然堤防と写真に写る住宅の範囲はほぼ一致し、人びとが自然堤防上で生活していたことがわかります。こうした土地利用は、戦後の高度経済成長による工場進出が見られるようになるまで、長く続きます。

USA-M399-24・36(国土地理院HP「地図・空中写真閲覧サービス」)をもとに八潮市立資料館加工

八潮の歴史さんぽ

行ってみよう!
八潮の遺跡や文化財

